

労働安全衛生の世界的動向と ビジョン・ゼロ活動

向殿 政男

(公財) 鉄道総合技術研究所 会長
(一社) セーフティグローバル推進機構 会長
明治大学 顧問 名誉教授

1 はじめに

わが国の労働災害による死傷者数は、国、企業、および現場の作業員等のこれまでの懸命な努力で減少を続けてきた。例えば、1961年の6,712人を数えた労働災害における死者数は、2015年には1,000人を切った。その後は、徐々にではあるが、死亡者数は減少している。しかし、けが等を含めて死傷者数については、残念ながら、下げ止まっていて、このところ、かえって増加傾向さえみせている。サービス業などの第三次産業における災害が増えだしていることを考えると、製造業におけるものづくりを主な対象としてきたこれまでの労働安全衛生活動のままでは、これ以上の死傷者数の減少は、限界なのではないだろうか。ここで新し視点を入れた抜本的な活動を導入しない限り、これ以上の削減は無理なように思われる。

そのような折、欧州を中心に、安全 (Safety)、健康 (Health)、幸福 (well-being) を掲げたビジョン・ゼロ (Vision Zero) 活動が盛んになり、世界的な大手企業を中心にビジョン・ゼロ活動に参加する企業が増えつつあって、労働安全衛生の大きな世界的潮流になりつつある。わが国のこれからの労働安全衛生活動において、大いに参考になるだけでなく、積極的に参加する価値のある動きであると考えられる。

本稿では、ビジョン・ゼロ活動の参加に至る筆者の経緯と経験とを紹介することを通して、労働安全衛生の最近の動向とビジョン・ゼロ活動の内容について簡単に紹介する。

2 未来安全構想について

安全に対する社会的価値の向上を図ることを目指し

て、2016年7月にセーフティグローバル推進機構 (IGSAP)¹⁾ が設立された。IGSAPは、ものづくりの世界はもちろんのこと、非製造業を含めて幅広い業界・業種における施設・設備の安全化や働き方改革の重要性を主張し、かつ安全化に対する幅広いニーズに応じて活動することを当面の目的としていた。筆者が、ビジョン・ゼロ活動に出会うきっかけとなったのは、IGSAPが、2017年6月に日経BP総研と共同して、今後の広い分野の安全の在り方を「未来安全構想」²⁾ としてまとめて、公表したことによる。未来安全構想の狙いは、現在、ICT技術の発展によって私たちの社会は世界的な潮流である第四次産業革命にともなって高度化しつつあり、わが国でも Society 5.0 にむけて社会の変革や働き方改革も含めて未来社会を創り上げようとしているが、その礎として、まず安全を構築していくことが大前提であると

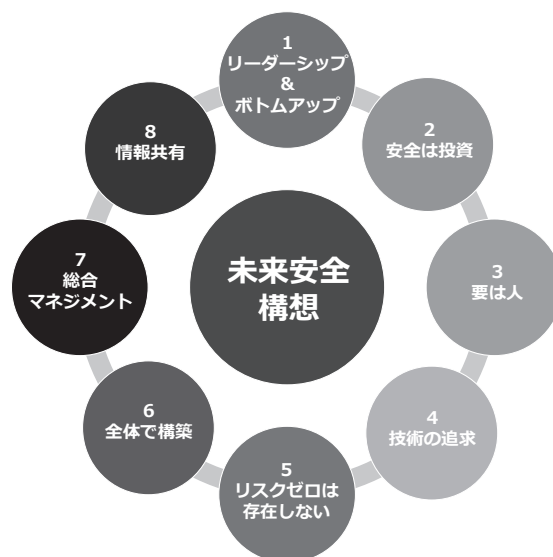


図1 未来安全構想²⁾

主張することにあつた。提言した未来安全構想は、安全を基礎とした未来社会創生の道しるべとなることを期待して、次の8つの目標からなっている(図1)。

- 1) 安全はトップダウンとボトムアップの両輪で推進
- 2) 安全はコストではなく投資
- 3) 安全衛生の要は人であり、その対象は人である
- 4) 最新安全技術を追求する
- 5) リスクゼロは存在しない
- 6) 安全は、国、企業、個人の全体で構築
- 7) 安全は技術、組織、人の総合的マネジメント
- 8) 事故情報は社会で共有

ここに掲げられた目標は、誰もが考える当然の内容のように思えるが、筆者が長い間従事してきた安全学³⁾の成果の集約という面も持っている。また、将来の社会の安全のあるべき姿をイメージして、それからバックキャスト的に考えて、今、重視すべき課題のリストにもなっている(これらの各項目の詳しい内容については、文献^{2),4)}を参照されたい)。

3 ゼロ・アクシデント・ビジョンからビジョン・ゼロ・サミットへ

この未来安全構想の内容を社会に広く知ってもらうことを目的に、そして、わが国から提案している安全の新しい技術と思想であるSafety 2.0や協調安全の考えを広く知ってもらうために、2017年6月に第1回国際安全シンポジウム⁵⁾を国内で開催し、それらの内容を紹介した。さらに、2018年10月にフランスで開催された産業オートメーションの安全に関する国際会議(SIAS 2018)⁶⁾等で、未来安全構想、safety 2.0および協調安全の内容について公表した(Safety2.0や協調安全については、参考文献⁷⁾を参照されたい)。

上記の第1回国際安全シンポジウムに基調講演として招待されていたドイツ連邦共和国労働安全衛生研究所ディレクターのディートマル・ライナート教授が、この未来安全構想を聞いて、次のような情報を教えてくれた。

現在、欧州ではフィンランドを中心に似たような発想で労働安全衛生に関してゼロ・アクシデント・ビジョン(ZAV: Zero Accident Vision)なる活動が行われている。そのためフォーラムが作られている。これは、現在、欧州全域に広がりつつあるので、ぜひ、調べられたらどうかということであった。さらに、このゼロ・アクシデント・ビジョンの発想は、日本の中央労働災害防止協会(中災防)が始めたゼロ災運動からヒントを得ているのではないかとのことであった。早速、その内容を調

べてみると、各企業の経営トップが、ゼロ・アクシデント・フォーラム(ZAF: Zero Accident Forum)というフォーラムを組んで、ゼロ・アクシデント・ビジョンという標語(表1は、その中の主なものである)に従い、活動する組織であることが分かった。そこでは、災害は減らせるものとして努力をすること、および、労使は協力してリスクを下げるができること等を宣言して、フォーラムに参加している企業が、お互いに学び合い、協力し合うことで労働災害を減らすことを目的としていた。そして、フォーラムに参加している企業の労働災害数の平均は、参加していない企業のそれに比べて格段に少なくなっているという事実が分かった。

第2回国際安全シンポジウム⁸⁾では、「英建設業の安全実績が世界で一番高い理由」について、英国からHSE(英安全衛生庁)国際本部主任審査官のニック・リグビー(Nic Rigby)氏を招き、その理由について聞く機会を得て、トップがしっかりとした理念を掲げてステークホルダー全員の安全を管理する重要性を知った。

そして、第3回国際安全シンポジウム⁹⁾が2018年11月開催されたとき、基調講演としてわが国に招待されていた国際社会保障協会(ISSA)の事務総長であったコンコレフスキー(Hans-Horst Konkolewsky)氏(*本章末尾に注記)から、ゼロ・アクシデント・ビジョンはさらに進化して、現在は、ビジョン・ゼロ(Vision Zero)なる活動に発展していることを教えられた。事実、ビジョン・ゼロ活動は、2017年9月にシンガポールで開催された第21回世界労働安全衛生会議¹⁰⁾において最初のローンチ(出発式)が行われていた。コンコレフスキー氏らも、これらの活動の出発点は、わが国の中災防のゼロ災運動であることを聞いた。ビジョン・ゼロの考え方は、次章で紹介するように図1の未来安全構想にも近く、この活動は近い将来、世界の潮流になるに違いない、わが国にも大きな影響を及ぼすだろうとの確信のもとに、第3回国際安全シンポジウムの直後に、同じ会場でわが国でのビジョン・ゼロのローンチ(発足式)を

表1 ゼロ・アクシデント・ビジョン (Zero Accident Vision) と従来の安全管理との比較の例

従来の安全管理	Zero Accident Vision
災害は防止するもの	安全は作るもの
リスクは管理するもの	安全に対するリーダーシップと優れたビジネスセンスが必要
ゼロ災害は目指すべき目標である	ゼロ災害は、実現可能なあくなき探求である
災害は失敗だ	災害は学ぶ機会だ
安全はコストとみなされる	安全は投資とみなされる
管理体制を重要視せよ	文化、教育、そして制度を重視せよ
安全は優先事項である	安全は価値である

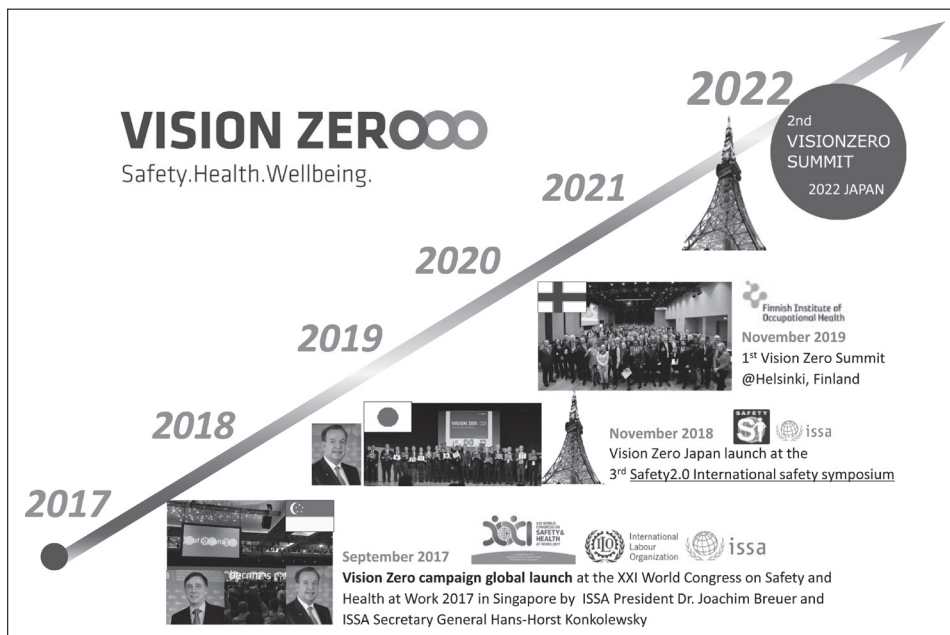


図2 我が国におけるビジョン・ゼロ活動の経緯

行った。

そして、2019年11月にビジョン・ゼロに関する各国の代表が集まるサミットとして、記念すべき第1回ビジョン・ゼロ・サミット^{11)~12)}が、フィンランドのヘルシンキで行われた。ここには、わが国から、中災防、労働安全衛生総合研究所、清水建設、IDEC、およびIGSAP関係の筆者等の多くが参加した。次の第2回ビジョン・ゼロ・サミットの開催地は、ここで提案され、その後正式に決定されたが、何と、2022年にわが国で開催されることになった(当初は、2021年開催の予定であったが、コロナ禍の関係で2022年になった)。現在、その開催に向けて、関係各位が懸命に取り組んであるところである。

以上のビジョン・ゼロ活動および第2回ビジョン・ゼロ・サミットを日本開催されるに至った経緯を図2に示す。なお、これまでのビジョン・ゼロの活動の経緯については、IGSAP理事の藤田俊弘氏の文献¹³⁾にも詳しいので参照されたい。

【*注記】コンコレフスキー氏は、現在、ORP (Occupational Risk Prevention) Foundation Internationalの会長であるが、当時、ISSAの事務総長であり、ビジョン・ゼロキャンペーンを世界的に展開中であった。なお、ISSAは、ILO (国際労働機関) の関連機関である。

4 ビジョン・ゼロの理念

ビジョン・ゼロ活動は、ISSAによる大々的なキャンペーンから、現在は、この概念を取り入れてILOが、

「労働安全衛生のためのグローバル連合」(The Global Coalition for Safety and Health at Work) を構築し、動きだしている。ビジョン・ゼロ活動が、全面的、かつ実質的な労働安全衛生活動に関する世界的な動きになりつつある。

ここで、ビジョン・ゼロの理念について簡単に振り返ってみよう。欧州を発端としたゼロ・アクシデント・ビジョンが進化して、2017年に立ち上げられたのがビジョン・ゼロという概念になり、現在、世界の労働安全衛生の大きな流れになりつつあると述べた。ビジョン・ゼロの詳しい内容については、文献^{14)~15)}を参照して頂くこととして、ここではその概要についてのみを紹介する。

図3が、ビジョン・ゼロにおける3つの要素である。



図3 ビジョン・ゼロの3要素

すなわち、ビジョン・ゼロの三つの要素として、

- (1) 安全 (Safety)
- (2) 健康 (Health)
- (3) 幸福 (Wellbeing)

が掲げられている。これまでの労働安全衛生では、安全から健康までが主なターゲットであったが、ここで初めてその先の目標としてウェルビーイング (Wellbeing) が掲げられている。ウェルビーイングを幸福と訳すのは正しいか否かは分からないが、労働安全の次の目標として幸福が掲げられていることは画期的である。企業経営の真の目的は、利益追求ではなく、顧客の安全と従業員の安全、および社会への貢献を目指す企業安全の3つの安全であると筆者は考えている。やっとな、安全を経営の一環として、企業トップが安全をマネジメントの視野に直接入れてきたといえる。

図4が、ビジョン・ゼロの7つのゴールデンルールといわれるものである。すなわち、

- (1) トップがリーダーシップをとる
- (2) ハザードを特定する
- (3) ターゲットを定義する
- (4) 安全なシステムを確保する
- (5) 安全な技術を確保する
- (6) 資格制度を推進する
- (7) 人財への投資”

の7つのルールが掲げられている。この7つのゴールデンルールは、前述した未来安全構想に似ていることにも驚かされる。お互いに独立に提言されたものであるが、目指すべき方向はほとんど一致していることが分かる。

2020年現在、世界的に名だたる企業を含めて15,000社以上の企業が、ビジョン・ゼロのサポーターとして名を連ねている。ビジョン・ゼロ活動は、現在、非常に広

く積極的に展開されており、その中の1つに、7つのゴールデンルールに基づいて各企業の安全文化や予防文化を自己評価するために、ツールの開発¹⁶⁾や、現在、前向き先行指標 (PLI: Proactive Leading Indicator) の研究などが行われている。

5 グローバル化と労働安全衛生

ビジョン・ゼロの活動は、労働安全におけるグローバル化の1つとも考えられる。労働安全衛生におけるグローバル化は、どう考えるべきであろうか。各国の文化や風土を尊重しながら、世界共通に労働安全衛生を展開するには、どうすべきであろうかという問題に突き当たる。これは、労働安全衛生マネジメントシステムの国際標準化ISO 45001の制定の時に突き付けられた問題と同じである¹⁷⁾。筆者が考えるに、まず、目的と理念を世界的に統一することである。例えば、ビジョン・ゼロが掲げる従業員の安全、健康、ウェルビーイング (幸福) の実現というような目的は世界どこでも共通である。

このように、高い立場での理念を統一して、その理念に則って活動し、各国特有の具体的な活動はそれぞれの現場に任せるという考え方、すなわち、大枠で同じ方向を向いて活動し、具体的なことはそれぞれの工夫に任せるという考え方が大事である。これは、世界レベルだけでなく、国レベルでも、また、企業レベルでも同じはずである。このような考えのもとでは、わが国は、労働安全衛生の理念として、ゼロ災運動の理念やビジョン・ゼロの概念を用いて、ビジョン・ゼロのような世界的な活動に積極的に参加、普及、協力するのが望ましいと考える。また、ありがたいことに、労働安全衛生活動のツールとして、すでに、労働安全生成マネジメントシステムISO 45001という世界標準としての規格が制定されている。これを積極的に採用すべきである。

わが国の労働安全衛生活動は、長い間の懸命な努力によって、これまで素晴らしいものを数多く築き上げてきている。そこで得られたわが国独自の理念をビジョン・ゼロ活動に提案したり、また、現場の自主活動で勝ち得てその有効性が示されている独自の手法やツールをISO45001に提案したりして、世界の労働安全衛生活動に貢献することができれば素晴らしいことであろう。わが国の労働安全衛生は、世界の中の労働安全衛生であり、互いに学び合いながら世界に貢献するという意識がぜひとも必要である。わが国のOSH (Occupational Safety and Health: 労働安全衛生) 関係者は、ビジョン・ゼロの理念に基づき、グローバルなOSHコミュニティの一員となるように努めるのが望ましいと考える。

VISION ZERO

Safety.Health.Wellbeing.

◆7つのゴールデンルール



1. トップがリーダーシップを取る
2. ハザードを特定する
3. ターゲットを定義する
4. 安全なシステムを確保する
5. 安全な技術を確保する
6. 資格制度を推進する
7. 人財への投資

図4 ビジョン・ゼロの7つのゴールデンルール

6 おわりに

わが国のこれまでの労働安全衛生の活動は、主として現場での主体的な活動を重視するボトム・アップ的であったといえよう。一方、欧州で始まったビジョン・ゼロ活動は、わが国のゼロ災運動にヒントを得て、主として経営トップが主体的に取り組むトップ・ダウン的であるように思える。本来の労働安全衛生は、ボトム・アップとトップ・ダウンとが一緒になって協調して進むべきものである。ゼロ災運動の理念は、そこにあったはずである。現在は、ゼロ災運動の原点に戻って、両者を一本化する良い機会である。すなわち、わが国が、わが国の労働安全衛生活動の良さを知ってもらうとともに、主体的にビジョン・ゼロ活動に参加することにより、新しい労働安全活動で世界をリードする良い機会であると考えられる。第2回のビジョン・ゼロ・サミットが、2022年にわが国で開催されることが決まっているが、残念ながら、わが国では、このビジョン・ゼロ活動はほとんど知られていないのが現状である。この労働安全衛生に関するビジョン・ゼロの世界的な流れは、前述したように確実なものとして止まることはないだろう。ぜひ、この機会に、わが国でも多くの企業とともに国や政府も関与して、わが国に発祥の起源をもつビジョン・ゼロ活動の発展に貢献することを期待したい。

参考文献

1) セーフティグローバル推進機構 (IGSAP) <https://institute-gsafety.com>

- 2) 向殿政男, 高岡弘章, 荻原浩之, 未来安全構想, 日経BP社, セーフティグローバル推進機構, 2017-6 <https://institute-gsafety.com/wp/wp-content/uploads/2019/08/miraianzen.pdf>
- 3) 向殿政男, 入門テキスト安全学, 東洋経済新報社, 2016-3
- 4) 向殿政男, 労働安全衛生の目指すべき方向とその世界的な動き, セーフティダイジェスト, Vol.66, No.11, pp.2-7, 日本保安用品協会, 2020-11
- 5) 第1回国際安全シンポジウム <https://institute-gsafety.com/international-safety-symposium/2017-1/>
- 6) 第9回産業オートメーションの安全に関する国際会議 (SIAS 2018) <https://www.neca.or.jp/wp-content/uploads/SIAS2018.pdf>
- 7) 向殿政男, Safety2.0とはなにか, 隔離の安全から協調安全へ, 中災防ブックレット, 中央労働災害防止協会, 2019-5
- 8) 第2回国際安全シンポジウム <https://institute-gsafety.com/news/20171014-533/>
- 9) 第3回国際安全シンポジウム <https://institute-gsafety.com/international-safety-symposium/2018-3/>
- 10) 第21回世界労働安全衛生会議 <https://www.jisha.or.jp/international/exchange/report07.html>
- 11) ビジョンゼロサミット2019, Helsinki, Finland Vision Zero 2019 summit Helsinki-Strategy-Mindset-Practice-Vision Zero 2019 (ttl.fi)
- 12) ビジョンゼロサミット2019で中災防が発表 <https://www.jisha.or.jp/international/exchange/visionZeroSummit2019.html>
- 13) 藤田俊弘, 世界における新たな安全の潮流 Vision Zero (ビジョンゼロ), 安全と健康, Vol.20 No.8, pp.31-37, 中央労働災害防止協会, 2019-8
- 14) Vision Zero: <http://visionzero.global/ja>, ビジョンゼロの日本語の案内
- 15) Vision Zeroについては, 中災防のホームページに詳しい紹介がある https://www.jisha.or.jp/international/topics/201808_02.html
- 16) ビジョン・ゼロガイド: 災害ゼロと健康的な働き方のための7ゴールデンルール~経営者・管理者のためのガイドブック~, ISSA https://visionzero.global/sites/default/files/2018-06/VZ_Brochure_jp_web_180606.pdf
- 17) 向殿政男, 労働安全衛生マネジメントシステム ISO45001 (JIS Q 45001) 及び JIS Q 45100 について~その成立の経緯と意義~, ボイラ研究, No.411, PP.5-9, 日本ボイラ協会, 2018-10